

## 死の手紙、東へ？西へ？——説話伝承研究の試み——

水野善文

はじめに

あのとき何がジダンをそうさせたのか？ 世界中が注目するなか国の威信をかけて勝利を目指すチームの一員として、しかも、自分のサッカー人生の成否を決する最高にして最後の檜舞台に立ちながら。

等しくことばを対象として学ぶ者たちのあいだでも、件の場面は、ことばというものをめぐって様々に分析がほどこされてきたのだろうと思う。筆者はといえば、瞬時に、個人のレベルを越えた民族の魂がそうさせたに違いないと確信した。真相はともかく、そんな歴史的柵を感じてしまう雰囲気の中での出来事だった（\*）。

筆者は現在、歴史的にも地理的にも、さらには社会的にも多様な言語状況を呈するインドの文学を総体として捉えなおし、あらたなインド文学史を記述する試みを、それぞれの言語を扱う研究者とともに共同して遂行していることもあって、文学・文芸が言語を超えて行き交うさまに強く関心を抱いている。そうした視点を、本稿では大胆にも、南アジア圏からさらにユーラシア全体にひろげ、説話のある一つのモチーフを題材とし

て、広汎でダイナミックな文化の往来を追ってみたい。

言語および民族を超えうる文学・文芸をとおして人間の感性を探索することは、民族間の対立・紛争がいかにも愚蒙であるかを再認識させてくれるであろうし、情報伝達手段がごく限られていた時代の人間たちが互いに理解し合いながら生きようとした智慧にも思いを至らしめてくれるだろう。温故知新を気取るわけではないが、これから提示する一つの文芸の、世界を渡り歩くさまが人類共生の証左とならんことも、ほのかに期待するものである。

ただ、説話モチーフ研究は、筆者にとって初の試みで、その方法も先達の例に倣いながらの試行錯誤にならざるを得ないことを予めお断りしておく。文献学を旨とする立場から、民俗学の成果をも踏まえつつ進める作業になるだろう。また、話題は筆者の専門領域を超えて、ヨーロッパやインド以外のアジア諸国にも及ぶから、諸方面の専門研究者のご意見を是非とも賜りたく思っている。

さて、そのモチーフだが、今回は「死の手紙」および「書き換えられた手紙」を扱うことにする。じつは以前、世界の表現文化に関する研究会に参加しており、共通テーマとして手紙

が設定され、筆者はインドの古代から中世、近代の一部まで、文学作品を中心に調査を担当したことがあった<sup>1)</sup>。

また、口頭伝承に大きく依存してきたインドの文化史・文献史を探究するうえで必須であるにもかかわらず等閑にされてきて、最近になって漸く注意が向けられるようになった視点、つまり、文学・文芸の伝承過程を注視することの必要性を筆者もかねがね感じていた。そうした口頭伝承と文献伝承の様相を観察するという意図から、民話をベースにその殊勲の主人公は実は前世のブツダであったと位置づけてまとめられたジャータカの中から、手紙の描写部分を拾い出し、口頭での伝達が主な手段であった時代における文字文化の一端を探るという作業をおこなったこともある<sup>2)</sup>。

今回、説話伝承研究の対象モチーフとして手紙を選択したのは、そうした成り行きからなのだが、文字という形で残された声の文化（＝説話）のなかにまた文字の文化（＝手紙）を探ることになり、そういった意味でユニークなトピックと言えるだろう。手紙を書くという習慣は識字という条件を必須とするから、手紙をモチーフとする説話そのものも、当然、文字文化の発達した地域でなければ受容されえないものではあるだろう。だが、たとえ自分は文字が読めずとも、手紙と言うものの存在さえ知っていれば、つまり、ある水準の文字文化環境下にありさえすれば、手紙にまつわる話を楽しむことは可能である。また実際、文字が読めない人に当人が不利となる内容の手紙が託されるという例もでてくるから、社会における識字の微妙な差異が物語自体を成立させているということもありうるだろう。この拙論では、そうした文字文化の様相を詮索するこ

とは傍らにおき、あくまでも手紙をモチーフとする一文芸のダイナミックな展開を追うことを主眼とする。

#### チャンドラハーサ物語

11—12世紀頃の成立と見なされる [Derrett: 27] サンスクリット作品『ジャイミニ・パーラタ (Jaimini-bharata)』は、『マハーバーラタ (Mahabharata)』の第14巻、馬祠の巻 (asvamedhika-parvan) の体裁を模倣しながら、本家にはない多くの伝説や説話を含んでいる [ヴァインテルニッツ 1965: 285]<sup>3)</sup>。ところが、そのひとつにチャンドラハーサの物語がある。

その『ジャイミニ・パーラタ』のサンスクリット原典はムンバイ (1850, 1860, 1863, 1885, 1932)、『ロルカタ (1870) [Smith: 194]、ブネー (出版年不明) [ヴァインテルニッツ 1965: 455] で刊行されているとのことだが、世界中のサンスクリット学者から継子扱いされた [Derrett: 19]。ためか本邦でもほとんど研究された形跡がなく、諸機関での所蔵を確認できずにいた。やつとこのことでシックによるベルリン版からチャンドラハーサ物語のテキスト部分だけが抜き刷り製本されたものを見つけることができた [Schick]。4) 『ジャイミニ・パーラタ』の第50章、第21偈から第58章まで、合計<sup>613</sup>偈 (8音節×4脚のシュローカ、および11音節×4脚のインドラヴァジラーなどの韻律からなる) で構成されている。(今回は精読する時間的余裕がなく文字通り斜め読みであることを白状せねばならない。いづれ全体を翻訳するつもりだ。) 民話の形をとるものも含めて、

数多く存在する近代語バージョンについては後述するが、まずは、その物語の梗概をグリヤソンが英語で概要紹介する中世ヒンディー（以下H）語（ブラジ・バーシャー）の聖者列伝『バクトウ・マール (Bhakt-mal)』の注釈書（一七二二年）<sup>5</sup> [Grierson 1910]に主に依拠して示しておこう。これが『ジャイミニ・バーラタ』所収のサンスクリット（以下Skt）版チャンドラハーサ物語に最も近いと思われるからであるが、適宜Skt版と異なる部分を補いながら、語り部調に記してみる。へ～内は、筆者による補足である。

ケーララ地方（南インド）にメーダーヴィーという王がおつたそうじゃ。その王にはまだ乳飲み子の王子がおつたが（H版では既にチャンドラハーサと命名されているようだが、Skt版では未だ名前は出てこない）、隣接競合する他国の王に侵攻され討ち死に、王妃も世の習いで自ら後を追って自害してしまった。〈Skt版にはサテイー（寡婦殉死）という語は出ないがH版にはあるようだ。〉幼い王子は乳母が連れだし、カウンプラという国に逃れたそうじゃ。乳母はその町の行政長官ドウリシュタブッデイの家に住え、孤児を我が子として育てていたんじやが、三年ほどすると死んでしまった。

かわいそうになあ、五才にして天涯孤独となった少年が路上生活を送っていると、ナーラダ仙人が慈悲をたれてな、シャールグラーマ石<sup>6</sup>でできたヴィシシュヌ神のご神体を授け称名の功德も説いてくれたんじや。少年は言われたまま日々実行、実行。

ある日、ドウリシュタブッデイの家でバラモンの饗応がなされるとな、町の子供たちも集まってきたそうじゃ。ドウリシュ

タブッデイが自分の娘の結婚運をバラモンに訊ねると、そこにいた孤児の少年を指さして、「あの子があなたの娘さんの婿になるでしょう」と予言したんじやよ。ドウリシュタブッデイは恥辱にもつたんじやね、その少年を亡きものにしようとして、手下（Skt版では賤民チャンドラ）に人里離れたところへ連れ出して殺すよう命じた。ところがじゃ、いざ手に掛けようとするが、少年の幼気でもいかにも利発そうな顔を見て逡巡してしまつた。そんな手下の前で少年は、口に入れて隠し持っていたシャールグラーマを取り出し、水で浄め花を供えて礼拝するんじや。するとな、手下は憐憫の情が湧き、力抜け地に伏す。同時に神への信仰心もおこつてきた。少年の片方の足（Skt版では左足）に六本めの指があるのを見つけてな、それを殺害の証拠とすべく切り取つて少年を逃がしてやつたんじやよ。

カウンプラ国チャンドラナーヴァティー地方にカリンダという領主がおつてな、森へ狩りに出掛けたおり、鹿の群にぐるつと守られ頭上は鳥が飛びかう、神々しい少年を見つけ、宝物を発見したかのように近づき抱きかかえたんじや。領主には世継ぎがおらなかつたので、我が子として（月のような顔で良く笑うから、チャンドラハーサ（月の笑い）と名付け（Skt版）育て、成長したその子に領土を譲つたそうな。

稼ぎを神事にばかり費やし、カウンプラ王への献納を怠つたらしい？ 長官ドウリシュタブッデイが軍勢ともども派遣されてきたんじや。歓待する領主の親子。ドウリシュタブッデイはその息子のほうが、あの孤児だったやつに違いないと気づき、またもや殺害を画すんじや。手紙を書いてチャンドラハーサに渡し、中身を決して見ないよう釘をさし、郷里の息子マダ

ナに届けるよう頼んだんじやよ。気安く請け負ったチャンドラハーサ。手紙を届ける旅の道すがら、すでに長官所有の逍遙林にあつてシャーリグラマーを拝んでいると、そのご加護なんだろうね、眠気を催し寝てしまつたんじや。

そこに女友だちへSkf版では、国王の娘と遊びにきていたドウリシュタブッデイ長官の娘、ヴィシャヤーつていうんじやが、一人仲間と離れたすきに、寝込んでいるハンサムな青年を見つけて、一目惚れしてしまつた。ふと、彼の懐から半分ほどのぞいている手紙に、父の筆跡で兄マダナの宛名があることに気づく。それをそつと取り出し、きれいに開封して読むと「すぐに、この手紙の持参者に毒(visha)を与えよ」つて書いてあるじやないか。父への怒り、この少年への思い、さまざまな思惑のもと、自分の睫の墨へSkf版ではマンゴの樹液でvishaのうしろに毒を加えて、自分の名前ヴィシャヤーとし、父の筆跡を真似て封印もし、手紙をもとに戻したんじや。

眠りから覚めたチャンドラハーサ。約束通り届けられた手紙をマダナが読むと、そこには「すぐに、この手紙の持参者にヴィシャヤーを与えよ」と書いてある。マダナは目出度きことと歡喜し、そのとおり即座に、バラモンを呼び莊嚴な婚儀を催してしまつた。

カリンドダを捕縛しチャンドラハーサの住民も虐殺したりと、悪業無尽のドウリシュタブッデイが我が家に帰還。さー、吃驚だ。マダナに聞いたはずも、確かに手紙には娘を与えよと書いてある。怒りと動揺を内に隠し、次の策を考えてチャンドラハーサに言うんじや。「我が家には仕来りがあつて、花婿はドウルガー女神へSkf版ではチャンディカーに詣でなければな

らない」と、寺院参詣をしむけ、また殺し屋を手配したんじや。折しも、跡継ぎをもつていなかったカウンタラプラ国の王が、チャンドラハーサの人品聞き及び、自分の後継者と決心してしまつた。まず長官の息子マダナを呼びだし、チャンドラハーサを召し出させようとするんじや。マダナは我がことのように喜びいさんで、花と香をもつて寺に向かつていたチャンドラハーサを呼び止め、至急王宮に登るよう伝えるとな、寺参りは代わりに自分が行くつて言うじやないか。はたして、マダナは寺についたとたん、父親が手配した殺し屋の手に掛かつてしまつたんじや。

チャンドラハーサの国王即位とマダナが代わりに寺院参詣に行つたことを聞き及んだドウリシュタブッデイはな、寺に急行するも、息絶えた息子の姿に絶望し自ら命を絶つんじや。

そのあと駆けつけたチャンドラハーサ。ドウルガー女神に我が身を賭して二人の再生を願ひ出るんじや。するとな、女神が顕現、一部始終を話して聞かせるが、チャンドラハーサはそれでも自分の命に替えて二人を再生させてほしいと懇願する。女神はさぞ満足したんじやね、チャンドラハーサの命を奪うことなく二人を生き返らせたんじや。

その後チャンドラハーサの治世は長く続き、世の人々は信仰心篤く、常に神の名を唱え良く奉仕したんだとき。

『ジャイミニ・バーラタ』はいくつもの民衆日常語にたびたび移植された【Brockington: 493】。いわゆる二大叙事詩にくらべ緩やかな伝統しか保てなかつたよう<sup>7</sup>、今見たチャンドラハーサ物語などの挿話部分が省かれることもあつたというが

〔Smith: 205〕<sup>7</sup>、ヒンディー語、西部のグジャラーティー語、マラーティー語、東部のベンガリー語（中世く年代？）、アッサミー語（16—17世紀ころの古アッサミー版も存在）、オリヤー語のそれぞれに多くの詩人たちの手になる翻案が存在するという（詳しくは〔Smith〕および注4）。また、南インドでは（物語の舞台自体がケララだったが）16世紀にはラクシュミーシャ（*Laksmīśa*）なる詩人がカンナダ語で翻案「太田42」、それをもとに、児童向け教育漫画本として広く普及しているアマル・チットラ・カタールのシリーズのなかに英語で出版されている〔Pai〕。さらにケララ地方の言語マラーヤラム語版も存在するようだ「サイト情報」。古くウィラーが『インド史』のなかで要約して内容紹介しているもの〔Wheeler〕については、依存したテキストの情報が示されておらず、何れのヴァージョンに基づいているか不明だが、肝心の単語「毒」および娘の名を *bika* および *Bikya* と翻字しており、デーヴァナーガリー文字を使用したいずれかのテキストに直接もしくは間接的に依拠したものと推測される<sup>8</sup>。

民話レベルについてグローバルな視点からは後で見るが、例のAT記号を踏襲し累積収集したユーサによる最新の民話類型別目録〔Uther〕にも所収の、トムソンらによる南アジア地域に限定した書目〔Thompson, 1958〕には、死の手紙（K978 および K1612）<sup>9</sup>、もしくは書き換えられた手紙（K511）のモティーフを含む民話の例が30ほど存在することが紹介されている。そのうち情報源まで遡及調査できたのは8例ほどにとどまったが、主人公がチャンドラハーサという名前で登場しストーリー展開もほぼ同一の民話が、一つだけ、ムンバイーの高校教諭

ゴードボーレーにより英語で報告されているのを見つけた<sup>10</sup>。詩人による翻訳・翻案という形での移植・拡大と、それと連動していたのかもしれないが、他方で、民間レベルでの口頭伝承による拡大もあつたことが窺える。網羅的に内容を比較検討すれば、詩人による原テキストの翻訳・翻案と見なされているもののなかにも、民間伝承より取材した部分が認められる可能性は皆無ではない。そうした詳細研究は他日を期す。

様々なヴァージョンが存在し、その相互の関連を探究することも課題となりうるチャンドラハーサ物語であるが、『ジャイミニ・バーラタ』系のこれら一連のものを、本稿における以降の議論のなかでは、よりマクロな視点を主眼とすることから、ひとまとまりのものとして扱うことにする。ただ、中世ヒンディーの『バクトウ・マール』だけは、聖者列伝という教派が提供するテキストであることに注意しておきたい。もつとも『ジャイミニ・バーラタ』自体もヒンドゥー教バクティ信仰の枠内で展開したと見なされうるもののだが〔Keith: 480〕〔Koskikallio 1993: 111〕、その検討も別の機会としたい。

今注目したいのはデレットによる興味深い見解である。チャンドラハーサ物語を含む『ジャイミニ・バーラタ』はヨーロッパからもたらされたものであるというのだ〔Derrett〕。中世アラブ商人の広汎な往来は、物資だけではなく文化面でも東西交流に貢献したという前提のもと、アラビア語を媒介として聖書やアレキサンダー物語が各地に広まったという。とりわけ後者の、冒頭部に登場し重要な役どころをはたすアレキサンダー王の愛馬ブケファロスの伝説は『ジャイミニ・バーラタ』の舞台

設定である馬祠祭（アシユヴァメーダ祭、注3）と関連する。さらに、魔法の石、女性の王国（アマゾネス伝説）、樹木が人間・獣を果実としてもつ国の話、無頭や六本腕などの怪物の話、島に住む聖者の話など、ユダヤ起源の説話がアレキサンダー物語に組み込まれ、そのアラビア語版がインドまで至ったという。また、旧約聖書および新約聖書からの借用とおぼしき箇所指摘や、ヒンドウーのバクティ信仰の対象であるクリシュナ神のキリストとの類似性、女性に対する姿勢における西洋的要素も指摘している。とりわけチャンドラハーサ物語に関しては、「死の手紙」モティーフなどを共有する、ギリシャ神話に発するベレロポン（Bellerophon）の話からの影響があつた可能性を認めている。

デレット自身、当初は逆にインドから西洋へ伝播したと考えていた [Derrett: 20] というが、<sup>6</sup>はたして『ジャイミニ・バラタ』はヨーロッパからもたらされたのであろうか？ デレットはベレロポン神話が中世期よりずっと古くインドにもたらされていた可能性を指摘しながら、「死の手紙」モティーフを含む、インドにおけるより古い作品例も先行研究の紹介とともに提示している [Derrett: 34, note 63]。

以下、その諸例を確認していこうとおもいますが、その前に、比較対照するための準備作業として、チャンドラハーサ物語をさらに小単位のプロット（ここではモティーフの低位概念として用いる）に分解しておこう。

プロット

A 無縁の孤児が跡を継ぐという予言。

- B 片方の足の六本目の指を切断し、殺害の証拠とする。
- C 「この手紙の持参者を殺せ」という死の手紙を、そうとは知らず届ける。
- D 手紙の持参者が眠っている間に、少女が自分と結婚させるようにという文面に手紙を書き換える。
- E 実の息子が自分が仕掛けた策略に誤つてはまり、殺される。

これらのプロットをAT記号（ユーサ版）と対応させれば、A-C-DがAT<sup>930</sup>「予言」に相当し、Bは、身体の一部を切り取つて証拠とする点で、AT<sup>462</sup>「追放された王女と鬼の王女」の一部と共通点を見いだせるが、これについては次の箇所でもまた扱うことにする。

インド古典に見られるその他の「死の手紙」モティーフ諸例

デレット論文にも一部言及されていたが [Derrett: 34]、<sup>7</sup>まざインド学の泰斗ヴァインテルニッツ（一八六三—一九三七）が「死の手紙」モティーフの表出作品として提供している情報 [ヴァインテルニッツ 1965: 284-286, 455-456; 1966 (a): 153-155; 1966 (b): 156, 492] をもとに、<sup>8</sup>各作品を確認しよう。

○「法施太子の本生」（『六度集経』卷第四、戒度無極章第二）  
康僧会（?—二八〇）訳

『六度集経』はいわゆるジャータカ（ブツダの前生譚） 91

話を、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六波羅密に分類して配したもので、原典は散逸しているが、漢訳年代から逆算して2世紀頃、インドにおいて成立したものと目されている。各話のほとんどはパーリ・ジャータカおよび他の漢訳にパラレルが見いだせるという【水野1966：72】。

この話は、王の妾に疎まれた王子が、妾の策略で眼をえぐり取られてしまうのだが、その際、妾は王の寝ている間に蠟封の菌型をとり、偽りの手紙（勅令）を王子に発したのである。王子は王の命令とあらば従わざるをえず、眼を切り抜く、といった場面展開のある話【成田：188-190】で、これは、モティーフAT462に近似している。

ユースアの述べるAT462のモデルケース【Utzer：1,273】はいうだ。王妃になりすました鬼女が他の王妃たちの眼を切除させ追放したが、のち王妃に宿っていた王の胤から成長した少年の存在に気づくと、その少年に死の手紙を渡し、母親の元へいかせようとする。その途中、助力者が現れ、手紙を書き換え、もとの王妃たちの眼も取り戻すことが出来る、という概要だ。

「法施太子の本生」では、手紙の内容自体が暗殺命令ではなく眼の切除である点、いわゆる「死の手紙」モティーフとは異なるが、実は、これとよく似た、いや全くパラレルとも見なされる【干潟：51】プロットが『アシヨールカ王伝』の「クナーラ王子物語」にも見られる（ほかに存在する仏典中の他の説話とのパラレルおよび関連研究については【平岡：63-64】）。マウリヤ朝の第三代のアシヨールカ王（位BC二六八―二三二）については語るまでもないが、その

伝記は様々なヴァージョンが存在し【山崎：6-10】「定方1982：200-208」、古くは安法欽による漢訳『阿育王伝』が三〇六年とされるが、サンスクリットで存在するのが『デイヴィヤ・アヴァダーナ (Divyavadana)』で、3―4世紀もしくは10世紀前後の成立という。アシヨールカ王の第一王妃ティッシュユラクシターが美しい眼の持ち主クナーラ王子を手玉に取ろうとするも断られ反感を抱く。クナーラが王位継承する段になると自分の立場保全のため、遠征先のタクシャシラー市民宛「クナーラの眼を抉れ」という内容の手紙を、寝ている王から密かに着けた菌型で蠟封して送る。クナーラはそれに従うのである【定方2000】。

このクナーラ王子物語には、エウリピデス（BC四八五―四〇六）作のギリシャ悲劇『ヒッポリュトス』（BC四二八）からプロットの模倣と見られる箇所があるとの指摘もなされている【定方1982：197】<sup>11</sup>。その一方、継母による息子にたいする誘惑というプロットは、インドから西方に流伝し、中世オリエントの『シンドバード物語』や中世ヨーロッパにおける『ローマの七賢人物語』の枠物語を構成することになったとする見解もあつて【岩本1978：208】、それも説話伝承の題材として面白そうだが、「死の手紙」モティーフから逸れるのでここでは深入りしない。

○「童子の本生」（『六度集経』巻第五、忍辱度無極章第三）  
康僧会（？―二八〇）訳

ヴァインテルニッツは言及していないが、同じ『六度集経』のなかの「童子の本生」に「死の手紙」モティーフがある

ことを、南方熊楠が紹介している「南方：357-358」。このジャータカについては他の仏典にパラレルはないようだ「干潟：37」。概要は以下の通り。

あるバラモンの「今日誕生した子は聡明にして高貴なる人になるであろう」という予言を聞いて、子を持たない商人が、生まれたばかりの赤子を拾った女性に金を支払ってその子を譲ってもらった。数ヶ月後、夫人が妊娠したので、その子を路傍に捨てたが牛飼いが拾ったので、仕方なくその子を引き取り育てる。妻に男子が産まれてその子が不要になったので、牛車の轍に捨てたが、牛が歩を進めないことで気づいた別の商人が拾う。もとの商人がそのことを知るや、また引き取って二人を兄弟として育て始める。拾い子のほうが優秀に育つと疎ましがりが増大し、山中に捨てるが、運良く助かる。ついに、陶工に「この子は禍の子だから、書を持っていかせるので、炉に投じて殺してくれ」と依頼し、子に手紙を持たせる。手紙を届ける途中、商人の実子である弟のほうがお遊びで賭けをしていた。負けているからと兄に交替を申し出、自分が手紙を届ける役を担うことになる。手紙を持参した弟は、そうとは知らない陶工に炉に投げ込まれ焼死してしまった。

失意に沈む商人は再び「この者の腰に石を縛り付け、深淵に沈めよ」と書いた手紙を蠟封して遠方の倉庫番のところへ持たせる。途中、あるバラモンの家に一泊することになったが、寝静まったあと、バラモンの娘が手紙に気づき、盗み読む。恐ろしい内容に驚くが、彼への好意から、もとの手紙を破り捨て、「バラモンの娘と結婚させよ」という内容に書き換えて元に戻した。

その手紙を受け取った倉庫番は直ちに婚儀を執り行う。その知らせをうけた商人は病になって、ついには死んでしまう。子は、自分を殺そうとした育ての親をも追慕し懇ろに葬送したことで、孝行の名声を得た。

ここでは、チャンドラハーサ物語のプロットBをのぞいて各プロットが見られるが、死の手紙が陶工に宛てられ、実子が身代わりとなって殺されてしまうモティーフはAT<sup>9</sup>10K「鑄物師への歩み（旧分類名：令状およびウリアの手紙）」[Uther: 535-536]に相当するものと言えよう。ここでもうひとつ別のプロットとして加えておきたい。

F 鑄物師（または鍛冶屋、陶工）へ「死の手紙」を持たせるが、途中で実子が役割を交代し殺されてしまう。

○「商人ゴーサカの物語」（『マノーラタプラーニー (Manorathapurani)』(アングッタラ・ニカーヤ注) および『ダンマパダ注 (Dhammapada-athakatha, vv21-23)』何れもブッダゴーサ (Buddhaghosa, 5世紀前半) [Hardy] [Burlingame: 128-138]

パーリ仏典のそれぞれ注釈書の中に見られる同一名の説話だが、ブツダゴーサは注釈書著者とみるより説話の収集・編集者とみなすべき役割を演じているという「ヴェンテルニッツ 1966 (a) : 148」。この物語の二つのヴァージョンについてパーリ語テキスト（および英訳）を見開き頁の左と

右に配し比較が容易なように提示しているハーディは、それぞれ数本の写本に依拠しているようだが、前者『マノーラタプラーニー』の写本はシンハラ文字によるものが主で、後者『ダンマパダ注』についてはカンボジア文字で記されたもの三本も用いているという[Hardy: 743]。それによれば、後者所収のヴァージョンが多少ながめだが、ほぼ同様の内容で、しかも、先の「童子の本生」に非常に近い。相違点のみ挙げておく。

・神の子ゴーサカが、人間界のコーサンビー（ウツタルプラデーシュ州アラハーバード近くの現存の地か？）の地で娼婦の男児として生まれたので、捨てられた。へ女児なら育てられたのに。へ・陶工宛の死の手紙を託すまえ、断崖に投げ捨てるという試みもあり、この時は崖の下でたまたま仕事をしていた籠細工師の積んであった葦の上に落ちて助かった。

さて、以上は仏教文献にのこる説話の例であったが、膨大な文献を今日まで伝承したジャイナ教にも、説話の集成があり、そのなかに「死の手紙」モティーフが見られる。

○『プラバンダ・チンターマニ (*Prabandha-cintāmaṇi*)』所収の話 (一一三〇六)

メールトウंगा (Merutunga) によってまとめられたこの書に同様のモティーフが存在することはヴェインテルニッツが簡単な言及だけしており[ヴェインテルニッツ 1966 (b) : 492]、サンスクリット原典 (Muni, Jinavijaya ed. 1933, Singhi

Jaina Series) に当たって見たが、その箇所を探し出せないでいる。

○『チャンパカ商主物語 (*Campakaseshi-kathanaka*)』 (15世紀) 15世紀中頃のジナキールテイ (Jinakriti) によるこの作品は、一連のカターナカつまり短編物語のひとつで、もと何かしらの注釈書に含まれていたものが、独立した作品に仕立て上げられたものだという[ヴェインテルニッツ 1966 (b) : 154]。ヘルテルのテクスト研究 [Hertel] があるが、プラークリット (民衆の日常語に近い言語の総称) の特徴をもつサンスクリットで記されている。ジャイナの聖典伝承がプラークリットに主に依拠したことから首肯できる現象なのだが、甚だ読みにくいようだ。これも現段階では扱うことが出来ずにいる。

○『ダマンナカ物語』『カター・コーシャ (*Kathakośa*) (物語の宝庫)』 (年代・編者不明)

これも同様に、プラークリットの韻文をまじえた粗悪なサンスクリットで記されているようだ[ヴェインテルニッツ 1966 (b) : 160] が、原典のサンスクリット・テクストは写本でのみ存在し刊本はない。トニーによる英訳 [Tawney] によって概要を見てみよう。

前世、スナンダという漁師だったがジャイナ信者となって不殺生の誓いをたて飢饉がおこっても魚を捕らさず耐えていた。親戚にせがまれて三回漁にでるが何れも採った魚を放して

しまう。だが魚同士がぶつかってヒレを傷つけたことに後悔し、断食の末自ら命果てた。次の世、裕福な商人の息子として生まれダマンナカと名付けられた。八才のとき、疫病によって家族がみな亡くなり、孤児になってしまう。サガラポータという名の商人の家に乞食に寄ったおり、たまたま居合わせた修行者が「あの子がこの商家の主になる」と人相から予言した。それを陰で聞いていたサガラポータはチャンドラ（賤民）を雇いその子の殺害を依頼する。だが、実行できず、小指を切り取って証拠だとサガラポータに見せた。森をさまようダマンナカをサガラポータ配下の牛飼いが見つけ養子にした。ダマンナカが青年に達したある日、牧場視察に来たサガラポータに彼の存在が発覚する。急ぎ引き返そうとしたとき、牛飼いが急ぎの用事なら手紙を書いてダマンナカに使い走りさせれば良いと提案する。そうしてしたためられた手紙をもってダマンナカが商家に向かう途中、疲れから愛神のお堂で眠ってしまう。そこに商人の娘ヴィシャヤが現れ、父から兄サムドラダッタ宛ての手紙をみつけ読むと、「こいつに毒（ヴィシャヤ）をまれ」と書いてある。娘は、父の書き損じに違いないと「ヴィシャヤを…」と書き換えた。はたしてその通り、二人は結婚する。街に戻ったサガラポータ、二人が結婚したことを知り、家のしきたりだからとダマンナカに女神の祠堂に詣でよう仕向け、またあの時のチャンドラに殺害を依頼する。新婚夫婦が参詣に向かう途中、兄のサムドラダッタが、もう日が暮れたからと、代わりに祠にむかい殺されてしまう。それを聞いたサガラポータも落胆のあまり死んでしまい、予言通りダマンナカが商家の主となった。ある尊師に前世を訊ねると「前世で三回魚を苦しめたから三回災

難に遭い、ヒレを傷つけたから小指を切られた。だが慈悲心ゆえにこうして今繁栄している」と答えをえた。

これは、前世の話が付加されていること、王ではなく商人という設定であることを除き、ほとんど「チャンドラハーサ」に近く、プロットA・B・C・D・Eをきれいに備えている。だがプロットFはない。

先ほど「ゴースカ」の研究者として紹介したハーディは、「ゴースカ」の二つの仏教系ヴァージョンに加え、「チャンパカ」と「ダマンナカ」の二つのジャイナ系ヴァージョン、そして「ジャイミニ・バラタ」（＝「チャンドラハーサ」）の計五本を比較検討し、仏教系の二本がより古いが、いずれもオリジナルと言えるものではなく、さらにそれらより以前に原初的な作品があつたはず、と結論づけている[Hardy: 787-794]。「童子」がそれに相当するのであろうが、オリジナル・テキストが散逸し漢訳だけで保存されたから、ハーディは見落としたものと思われる。

さて、今確認したところによれば、扱えなかった「チャンパカ」等のジャイナ系二本を除いて、仏教系の「童子」および「ゴースカ」とジャイナの「ダマンナカ」および「チャンドラハーサ」には一線を画せるほど、プロット構成上に違いがあつた。つまりこうだ。

- ・ 仏教系説話のプロット順…A・F(E)・C・D
- ・ ジャイナ系および「チャンドラハーサ」のプロット順…

ハーデイは意識しなかったようだが、このプロット構成の違いは重大だと思われる。時代的にも両者のあいだには隔たりがあり、仏教系説話が2世紀から5世紀なのに対し、ジャイナ系およびチャンドラハーサの各ヴァージョンは11世紀から17世紀、さらには現代にまで及ぶものもあることにも留意しておきたい<sup>12</sup>。

ヨーロッパに見られる「死の手紙」モティーフ諸例

—— 古典を中心に

「死の手紙」モティーフがインドから西洋に伝播したという見解をもつヴェンテルニッツの紹介「ヴェンテルニッツ 1965 : 455」によると、一八六九年発表の論文でヴェーバーが初めてこのモティーフを巡ってインドと西洋の諸作品の関係を指摘した「Weber」とのことだが、それには、上述の「ゴースカ」をふまえつつ、ウリヤ、ベレロポンから『ゲスタ・ロマノールム (Gesta Romanorum)』、グリム、シラーの詩まで扱われている。ヴェンテルニッツはさらにシツクの、我々は見ることのできなかつた J. Schick, 1922, *Corpus Hamleticum I, 1, Das Glückskind mit dem Todesbrief, Orientalische Fassungen*, Berlin. でも、すでに見た仏教系、ジャイナ系の説話のヨーロッパへの伝播という立場から諸例をあげて論じているといい、シェークスピアもそのなかに含まれるという。

そうした諸情報をもとに、時代順に整理して類話の内容を確認していこう。

○「ベレロポンの書状」『イリアス』(ホメロス、紀元前8世紀頃(筆写は前6世紀「松平・436-442」)、ギリシャ語)

ベレロポン(またはベレロポンテス)は、身を寄せていたプロイトス王の妃アンティアに言い寄られたが受け入れないでいると、逆恨みされ、妃は王にベレロポンによる強姦未遂という偽りを訴え出た。真に受けた王は、義父宛の書板(手紙)に命を奪う手だての委細を書いて、ベレロポンに持参させる。怪物退治、アマゾネス族の殲滅など三つの難題が課せられたが、何れも命落とすことなく成し遂げ、神の血を受けた英雄と見なされ、娘と全権が与えられた。「松平・上 190-192」「中村・中務・76-79」

これはプロットCのみが当てはまるが、神のご加護のもと結婚と権力を獲得するというハッピーエンドは「チャンドラハーサ」と共通している。ちなみに人妻が若者に恋し、言い寄るも断られ逆恨みするというモティーフは、既述の「クナーラ王子」のところで古い西洋的要素として見たが、もっと古くは紀元前13世紀頃のエジプト『二人兄弟の物語』にあるという「中村・中務 : 79」。

○「ウリヤの手紙」『旧約聖書』サムエル記下(1世紀頃、(へブライ語→)ギリシャ語訳)

ダビデ王が出征中の忠臣ウリアの妻バテシバと懇ろとなり、彼女が妊娠してしまったのでウリアを呼び出し、「死の手紙」を持たせて戦場に返した。激戦区に送られ戦死する。「松原：239-242」

これもプロットCのみが当てはまる。

○「教皇聖ペラギウス」「黄金伝説」(ヤコブス・デ・ウオラギネ(一一三〇?—九八)ラテン語)

神話文学の性格を帯びているキリスト教の聖人伝説は、アジア、アフリカ、ヨーロッパの異教伝承や土俗信仰を摂取しながら、多くの作者の手で形成されてきていたが、中世の黄金期に結実したのが、この『黄金伝説』だという「前田：1, 578」。この中のペラギウスにまつわる逸話の中に、求めるモチーフが現れる「前田：IV, 456-458」が、次項で扱う同様の作品『ゲスタ・ロマノールム』の逸話とほぼ同内容なので(『ゲスタ・ロマノールム』が『黄金伝説』の逸話に依拠しているという「伊藤：101」)、詳細はそちらに譲る。

○「受け取れ、返せ、逃げよ」『ゲスタ・ロマノールム』第20話(13世紀末イギリスもしくはドイツ、ラテン語)

編者未詳のこの書は、これ自体先行した多くのギリシャ・ローマ、ヨーロッパ中世の物語、のみならずインドの仏典、叙事詩、説話、ペルシア・アラビアの説話取材しつつ、

後世にも大きな影響を与えたとされるが「伊藤：857-869」、手紙のモチーフが二つの話に見られる。そのひとつが「受け取れ、返せ、逃げよ」である。

狩猟途中で日没となり森の小屋に一泊することを余儀なくされた皇帝は、そこで姿なき予言を聞く。その小屋の女主人がまさにその日産み落とした男子が皇帝の婿になるというのだ。皇帝は側近に殺害を命じるが、側近は上品な顔立ちに憐れみ、代わりに野兎の心臓を皇帝に差し出し、赤子は森に残した。ある公爵がその子を拾い、養子としてヘンリクスと名付け育てた。優秀な青年に育つと王宮に取り立てられる。あまりの有能ぶりと例の子ではないかとの疑念から皇帝は妃あてにその青年の殺害命令書(死の手紙)を書くが、それを持ったまま訪れた教会でうたた寝している間に、司祭が気づき、姫と結婚させよという内容に書き換えた。はたして、その通り結婚式が挙行されるが、皇帝は神の摂理と悟り受け入れた。「伊藤：96-104」

届ける役の本人に手渡す以前の段階ですでに「死の手紙」が、第三者である司祭によって書き換えられてしまう点で相違があるが、プロットとしては、A・B・C・Dが揃っている。

○「臭い息」『ゲスタ・ロマノールム』第283話(同上)

ローマ皇帝が寵愛する甥のフルゲンティウスに嫉妬した執事が、病で息が臭いという口実を巧みに使って二人の関係悪化の

奸計を謀った。皇帝は執事の指図のまま、石灰を製造する石焼き場の職人に「陛下の命令通りなしたか？」と訊ねる者が来たら即刻火中に投じて焼き殺せと命じた。フルゲンティウスを呼び出し石焼き場へ出向いて件の問いを発するよう仕向けるが、フルゲンティウスは途中ミサの鐘に教会へ立ち寄り、ミサのあとかなり長時間うたた寝をしてしまう。頃合いを見計らっていた執事が、もう事成つただろうと石焼き場へ出掛け「陛下の命令通りなしたか？」と訊ねると、「まだだ！」と捕まえられ火にくべられてしまった。あとから到着したフルゲンティウスは事情を聞き、神に感謝する。全ての事情を理解しあつて皇帝とも和解する。[伊藤：846-853]

手紙ではなく伝言によつていているが、明らかにプロットFに相当する展開が見られた。伊藤によれば、この話はゴージェイエ・ド・コワンシ（一一七七／八一―一二三六）による『聖話集 (Contes dévots)』のなかの一話「執事の息子を焼き殺そうとした王の話」に依拠し、ウォルター・マップ『廷臣閑話』、ブロムヤード『説教大全』、ノヴェラ『古譚百種』、『デカメロン』にも類話があるという[伊藤：852]。このうち確認できたボツカチオ（一一三三―一二七五）『デカメロン』第7日第9話「柏熊：107-127」は、年老いた貴族の若き夫人が下男と不倫をはたらこうとする話で、口臭は話題になるが、我々の求めるプロットは認められなかった。ただ、伊藤も関係を指摘しているように、われわれもあとで見るシラーの詩とは状況設定がよく似ている。

○『クースタン帝王の話』（13世紀、中世フランス語）

ローマ皇帝コンスタンティヌス一世（大帝）に準えた話が中世フランス語で散文と韻文の形で残っているという。松原の紹介するところ「松原：222-232」に従つて、要点を箇条書きする。

- ・ 占星術を心得た男のもとに子が産まれ、この子は将来ローマ皇帝になると予言する。〈プロットA〉
- ・ 皇帝は赤子の腹を切り裂いて、海に捨てさせようとしたが、侍従は僧院の門前に捨てる。〈プロットBに類似〉
- ・ 僧院長が拾つて、クースタンと名付け育てる。成長したクースタンの存在が皇帝に発覚すると、皇帝はクースタンの殺害をはかり、死の手紙を代官に届けるよう仕向ける。〈プロットC〉
- ・ 城の果樹園で時間待ちして寝てしまったクースタンを王女サベリナがみつけ一目惚れ、父が書いた手紙を見つけ、自分と結婚させるようにと書き換え、結婚式をあげる。〈プロットD〉
- ・ 皇帝は神の意志なら仕方ないと諦め、クースタンを後継者にし、二年後崩御する。

これはプロットBの、殺害の証拠としての身体の一部の切断という要素とEを欠くほかは、「チャンドラハーサ」と非常に近似していると言えよう。A・B・C・Dという構成だ。

ちなみに、この韻文ヴァージョンを一八七七年の『ロマニア』第6巻にコペンハーゲン王立図書館の写本をもとに校訂刊行したひとりアレクサンドル・ウエソロフスキーな

る説話学者がテクストのあとに類話も収集紹介しているという「松原：233-239」。松原によれば、ウエソロフスキーはこの説話の起源をインドとし、東ローマ帝国（ビザンティン）を経由して西欧に伝播したと考えたそうだ。さらに松原は彼の収集した類話の一部を紹介しているが、その中からプロットA（予言）・C（死の手紙）・D（手紙のすり替え）という構成を持つものだけピックアップすると、『フロリンドとキャラステラ』（一五五五、イタリア）、グリム（後述する）のほか、ノルウェー民話、デンマーク民話2種、フィンランド民話、ポーランド民話、チェコ民話、セルビア・クロアチア民話、アルバニア民話があるという。民話については後で見る。

○『ハムレット』（シェイクスピア）（一五九九—一六〇一、英語）

第四幕第三場のデンマーク王クローディアスの独白、および第五幕第二場でハムレットのホレイシヨへの告白から知られるように、ハムレットは自分の殺害命令を記したイギリス王宛ての親書を持たされたが、その中身を船上にて知り「親書持参の者二名即刻死刑に処せられたし」と書き換えた「野島：222, 291-294」。「死の手紙」の死の対象をすり替えたわけだが、プロットとしてはCとD（の変形）が当てはまる。

シュークスピアの戯曲には、この例のほかにも「人肉裁判」（ヴェニスの商人）など、数え切れぬほど民間説話のモチーフが散りばめられていると言われるが「三宅：92」、松原も言及する「松原：245」南方熊楠の論文には、このモチーフ

フの原話として13世紀初めサキソ・グラマチクスが書いた『丁抹（デンマーク）史（デン人の歴史）』にでるアムレツの話を挙げ、アムレツはデンマークの篡位者フェンから英国に派遣された船中で自分の殺害を命じた書を見つけ、娘を自分に嫁がせる旨英王に命じる文に書き換えた「南方：259」「伊藤：103」とのことだ。その原テクストを確認できなかったが、これもプロットCとDに当てはまり、とりわけDは、結婚へと導く書き換えの点で、女性側ではなく殺害されそうになった男性側の手によるという違いはあるが、一致している。

○「手なし娘」『ペンタメローネ』（ジャンバティスタ・バッジレ）（一五七三?—一六三二）（17世紀、イタリア語）

ペンタは兄である王から求愛され、兄のお気に入り自分の両手を切り取って兄に贈ると、兄は逆上しペンタを箱に入れて海にながす。初め拾われたのは船乗りによつてだったが、その妻が嫉妬深く意地悪でペンタをまた海に捨てる。次に拾った王がペンタを死に別れた王妃の後妻として迎える。王が他国に出張中、ペンタが男児の出産報告などを記した手紙を船長に託すが、途中嵐に遭い寄せてもらった例の船乗りの家で妻がその手紙を盗みよみし、嫉妬のあまり産まれた子は化け物の犬だったと書き換える。慰める王の返書も、立ち寄った船長のすきを見て、母子ともに火刑に処すようと書き換える。議会の機転でペンタは助かり、船乗りの妻が処刑される。「杉山・三宅：上340-355」

ここでは、「死の手紙」が書き換えられるのではなく、「死の手紙」に書き換えられている点で、今まで見てきたものとは大きく異なる。プロットDのみを認めるべきだろう。また、身体の一部の切除はBの要素の変形と言えようか。

○『坩堝への道 (Der Gang nach dem Eisenhammer)』(フリードリヒ・フォン・シラー(一七五九—一八〇五)一七九七年作、ドイツ語)

侯爵夫人に気に入られていた下僕フリードリンを嫉妬した腹黒い獵師ロベルトが侯爵に、フリードリンが夫人に言い寄ったと偽りを告げた。怒った侯爵は森の鍛冶屋に向き、「わしが最初に寄こす男が『ご主人様の言いつけ通りことをなしたか?』と訊いたら、そいつをこの坩堝(溶鉱炉)に投げ入れて焼き殺せ」と命じ、ロベルトを介して、フリードリンに鍛冶屋へ行つて訊ねてくるよう仕向ける。何も知らないフリードリン。素直に出掛けるも、途中で夫人が鍛冶屋の方向に何か用でもありはしないかと訊ねに寄ると、子供が病でミサに行けないから、代わりにミサに行つてくれるよう頼まれる。言いつけ通り教会に出向くと、農繁期ゆえ参列者なく、ミサの準備から後片付けまで祭司を手伝ったばかりか、祈りも怠らず祝福された。そのあと鍛冶屋のところへ行つて、例の如く訊ねると、「すでにちゃんと面倒見たわい」との返事。この返事をもって侯爵のところへもどると侯爵は吃驚するも、教会で侯爵夫妻の幸をお祈りしていたという事情を告げる。侯爵はロベルトの姿が見えなくなった

ことを天にまします神のお裁きと察し、夫人に神のご加護のフリードリンを愛おしむよう勧めた。[大野・石中：上254-270]

ここには手紙は出てこないが、『ゲスタ・ロマノールム』と同様にプロットFに相当する展開が見られた。参照した和訳本の注釈には、この詩はフランスの小説家レティーフの「物語集」から取材しているというが「大野・石中：上348」、年代から見てレチフ・ド・ラ・ブルトンヌ(一七三四—一八〇六)には違いないだろうが、遡及調査できなかった。

○「金の髪の毛が三本ある鬼」『グリム童話』(二八一九年採録、ドイツ語)

貧しい女に男子が産まれ、14才で王女を嫁にするという予言をするものがいた。それを聞きつけた王は、その子をとば巧みに引き取り、川に流した。水車小屋の夫婦が拾って育て14才になった。嵐に遭った王がたまたま立ち寄った水車小屋でそこにいた青年があの子だと気づき、国元の妃へ宛て、青年に死の手紙を届けさせる。途中道に迷った青年が身を寄せた泥棒屋敷で寝ている間に、泥棒がその手紙をみて、王女と結婚させるよう命じる手紙に書き換える。王女と結婚したその子に王は、地獄の鬼の首から三本の黄金の髪の毛を採ってくるよう難題を言いつける。……〔続く〕[関・川端：226-235]

このあと結局、悪巧みをした王が、欲のあまり、一生船頭をしなければならない境遇に陥る。この後半部分は別のモ

テイーフと見なされうるものなので、「死の手紙」関連だけプロットを整理すれば、A・C・Dとなる。

## インドの説話文学とペルシア、アラビア

前節ではヨーロッパの比較的古い文献に現れるモテイーフ例を拾いだしてみたが、地理的にインドとヨーロッパの間に位置するペルシア、アラビアの資料も観察する必要がある。

インドの動物寓話『パンチャタントラ (Pancatantra)』の現存テキストに先行した原本から、他の説話共々、6世紀に中世ペルシャ語(パフラヴィー)に翻訳されたこと(この訳本も散逸)に端を発して、古代シリア語(五七〇年頃)、アラビア語(七五〇年ころ『カリラとディムナ』に訳され、後者からヘブライ語(12世紀)、ラテン語(13世紀)へ、それから更にスペイン語(15世紀)、ドイツ語(15世紀)、イタリア語(16世紀)英語(16世紀)と翻訳伝承されたことは比較的よく知られ、そうした寓話の起源をめぐってイソップ寓話と議論が争われてもきた[辻: 165-166]。一部の挿話はラ・フォンテーヌの寓話(17世紀)やグリム童話(19世紀)に再収録された<sup>13</sup>。また岩本は、中世キリスト教聖者伝『バルラームとヨアーサフ』(この中のモテイーフが『ヴェニス商人』や『デカメロン』にも取り入れられたとする)は中世ペルシア語を介して、ラテン語の『七賢人物語』はアラビア語の『シンドバード物語』を介して、何れもインドとの関係を考察している[岩本1944: 118-119など]<sup>14</sup>。

先に紹介した「死の手紙」モテイーフを含むインド古典はいずれも、『パンチャタントラ』を初めとするサンスクリット文学のオーソドックスな、いわゆるカター (Katha) と呼ばれる説話文学に属するものではなかったのだが、このジャンルを代表する『カター・サリット・サーガラ (Katha-sariti-sagara)』(11世紀カシュミール)(ペルシア、アラビアに移植されたことが確かな『パンチャタントラ』をうちに含む)を確認すると、三カ所に類似のモテイーフがあった。

○「パラブーティ物語」では、魔女の呪文によって人肉を食らおうとする王と王妃が料理長と謀ってバラモンのパラブーティを犠牲にしようと、決めておいた伝言を伝えるに仕向けるが、途中で王子に代わってしまった王子が犠牲となる[岩本54: (1) 178] [Penzer: II, 113]。手紙は用いられないが、まさしく「坩堝への道」のプロットと同じ、Fの変形が認められる例だ。

○「宰相シヴァ・ヴァルマン物語」は、妃の浮気相手と誤解された宰相が、隣国へ派遣されたおり、殺害命令を記した王の密書をもった使者がその国の王のもとにやって来るが、機知を働かせて助かるという話[Penzer: I, 52] [岩本54: (2) 38-40]で、単なる「殺害命令書」であって自分で運ぶ「死の手紙」ではない。

○「パリテイヤガセーナ王物語」では、子授かりを祈願した果実を二つとも第一王妃に食べられてしまい、自分

は子供をもうけることが出来なかつた第二王妃が怨みを持ち続け、成長したその第一夫人の産んだ二人の王子を殺そうと、王の命令書を偽造する [Penzer: III, 263-267]。我々の求める「死の手紙」モティーフではない。

だが、ペンザーは「死の手紙」モティーフについて有益な注釈を加えてくれている [Penzer: III, 277-280]。すでに我々が調査したもの以外に、アラブの例が紹介されており、目を惹いた。「死の手紙」のことをムタラムミスの手紙と言うらしい。

詩人ムタラムミスとその甥タラファが王の妹を侮辱するような詩を詠んでいたのを王が聞き、二人それぞれに、持参者の殺害を依頼する手紙を厳封のうえ渡して地方領主のもとへ派遣する。途中怪訝に思つたムタラムミスは手紙の封を開けるが、二人とも文字が読めないで、近くにいた少年に読んでもらう。ムタラムミスはすぐ手紙を川に捨て、甥にもそうするよう勧めるが、甥は少年が読んだ中身を信用せず、王への忠誠を貫く。結局二人はその場で別れ、手紙の伝達を忠実に果たしたタラファが殺され、ムタラムミスは西方に進みシリアへ逃れた<sup>15</sup>。先ほど話題に出た『シンドバード物語』にも「死の手紙」モティーフがあり、さらにアルメニア寓話にもあるという。

### ○「アハメッド」『シンドバード物語』（8—9世紀）

孤児だつたところを拾われスルターンに育てられ寵愛されていたアハメッドが愛妾の浮気場面を見てしまった。告げ口を恐れた愛妾はスルターンにアハメッドに乱暴されたと嘘を訴え出

る。怒つたスルターンは奴隷に、「スルターンの命令を実行せよ」と言う者がきたら首をはねて次に来る者に渡せ、と命じた。その奴隷の下に遣わされたアハメッドは、途中で愛妾の浮気相手と出会い、役割を交替してもらう。その男の首がはねられ、最後には愛妾の浮気が発覚し処刑される。「ペリー：3738, 366-368（関連文献も詳しく紹介されている）」

これには手紙は使用されないが、「パラブーティ物語」『カタール・サリット・サーガラ』と同様に、プロットFの変形が見られる。

### ○「ヴァルダン<sup>119</sup>」「ヴァルダン<sup>120</sup>」『ヴァルダン寓話集』（13—14世紀、アルメニア語）

<sup>119</sup>話は上の「アハメッド」同様の経緯で命を狙われた青年が、王によって死の手紙を託されるが、日が暮れて立ち寄つた家が浮気相手の家で、そいつが代わりに手紙を届けて殺される「ペリー：38-39」。我々が設定したプロットでいえばCが当てはまり、Eの変形も認められる。<sup>120</sup>話は、「臭い息」（『ゲスタ・ロマノールム』）とほぼ同様の内容をもつ「ペリー：39-40」。したがって、プロットFが認められる。

### 世界の民話から

以上、説話集（あるいは聖者列伝）という体裁で文献化された諸作品からモティーフ例を挙げた。正確には、それら諸作品

においても、先行する文献からの翻訳・翻案の場合と、当時民間に流布していた話の全部または一部の採録の場合と、両様あつたはずだが、以下には、民間伝承から採録された、いわゆる民話について見てみよう。

ユーサの目録に従つて確認する<sup>16</sup>。

☆AT 462 「追放された王女と鬼の王女」

アイスランド、スペイン、ジプシー、シリア、パレスチナ、イラン、パキスタン、インド、スリランカ、ネパール、中国、ラオス、カナダ、チリ、エジプト、スーダンに分布している。そのうち遡及調査できたインドおよび東南アジアの話は以下のとおり。

・「勇敢なヒラルバサ」(一八七六年、パンジャービー語、シムラーにて)「ストークス：43-58」

・「鬼女の王妃」(カシミリー語)「ラーマヌジャン：141-149」[Knowles：42-50] = *Indian Antiquary* XVI, pp.185-188.

・「アークーンの話」(カシミリー語) [Stein：93-95]<sup>17</sup>

・「十二人姉妹の物語」(シャン族の民話)「ミルン：271-281」

・「アンコールの十二人の娘」『東甫塞物語』高垣：

11-18] [ペリー：368]

いずれもプロットC・D。

なお、南インドの説話“raksasi-queen” [Blackburn：244-245] は、この分類に入れられているが、手紙のプロットは出てこない。

☆AT 10K 「鑄物師への歩み(旧分類名：令状およびウリアの手紙)」<sup>9</sup>

南北アメリカを除く世界各地に広く分布。この分類に先述のインド・ムンバイで採録の「チャンドラハーサ」が含まれている。よつて、この分類に含められるものが、必ずしもプロットF(鑄物師への伝言)を備えているとは限らない。この点、充分注意しておきたい。

☆AT 930 「予言(金持ちとその婿)」

これも世界に広く分布している。南インドの民話“Poison him, Marry him” [Blackburn：62-64] はタミル語版の「チャンドラハーサ物語」とみなしうる筋書きをもつ。

世界の運命説話に注目して研究したブレードニヒは起源をインドに想定しつつ、AT 930(金持ちとその婿)に属する類話をヨーロッパ、とりわけ東欧から、ギリシャ：7、アルバニア：3、ブルガリア：4、ルーマニア：6、マケドニア：4、セルビア・クロアチア：8、スロヴェニア：1、チェコ・スロヴァキヤ：1、ジプシー：1、リトアニア：3、ラトヴィア：4、フィンランド：1、の計43話あつて詳細に比較検討している。我々とは別のプロットをたてて分析しているが、本稿のプロットで言えば、ほとんどA・C・Dをとっている。うち18話に、我々のたてたプロットEもしくはFに相当する展開が見られるようだが、具体的な内容紹介があつて確認できたのは一例、リトアニアの民話で、醸造所の煮えたぎった酒で火傷さ

せろという命令になつてゐる「ブレードニヒ：77-94」。これはFの例と見なせよう。

また斎藤が紹介するアルバニアの民話「斎藤」では、A・C・D・F（手紙ではなく伝言）となつていて、プロットFが含まれることに注目したい。

ヴリスロキが紹介する現ルーマニア領トランシルヴァニア地方のジプシーから採録した「太陽の王と三本の金髪」「ヴリスロキ：50-61」は、『グリム童話』の「金の髪」の毛が三本ある鬼」と、舞台と登場人物の設定が若干異なるもの、構成はほぼ同じで、プロットA・C・Dである。

ちなみに日本の「手無し娘」【関：884-899】はペンタメローネの「てなし娘」に非常に近く、「沼神の手紙（水の神の文使い）」【関：1015-1025】にはプロットCとDが見られる。

おわりに

さて、以上の調査からどんなことが言えるだろうか？ 網羅的に資料を収集して初めて可能になる説話伝承研究であるから「アールネ：63」、ここでの試みは遠い点と点を強引に線で結ぶようなものであり、スペキュレーションの誇りを免れえないかもしれない。だが、ほとんど二次資料ながらテクストに実際に当たつてみて、いわゆる類型分けが世界の膨大な説話群を僅かに整理するものに過ぎず、それで満足しては何も見え

てこないという実感を得たこともまた事実である。プロット分析が妥当なものか、的を射ていたと言えるのかどうか心許ないが、筆者なりに一応のまとめをしておきたい。

「死の手紙」および「手紙の書き換え」モティーフはシツク、ヴェインテルニッツ、アールネらはインドから西洋へ伝播したと見<sup>18</sup>、一方デレットはそのモティーフを含む『ジャイミニ・バラタ』を西洋からインドに至つたものと見た。作品の成立年代を定説に従うなら、「死の手紙」モティーフの最古はギリシャということになる。これが、デレットが言うように、早い時代にインドまでもたらされていた可能性は確かにある。紀元一千年期、インドには文献が存在するも、ヨーロッパでは旧約聖書に見られたあと12—13世紀に至るまで千年以上文献の空白期間があつて、口頭伝承には絶え間がなかったとしても、伝播の状況を読み解くことができない。

ここで、プロットF、つまり「鑄物師（鍛冶屋、陶工）への手紙ないし伝言」に注目してみよう。インドの2世紀から5世紀の仏教系説話に見られた後、8—9世紀アラブの『シンドバード物語』にも類似したプロットが存在し、11世紀インド西北部カシュミールの説話集にまた現れ、そのあと13世紀にアルメニア『ヴァルダン寓話集』やイギリス『ゲスタ・ロマノールム』に出現、そしてさらに18世紀シラーの詩および東欧諸国に伝わる民話に見られた。跡を追つていくと、インドから西への動きとして見えてくる。また、プロットB（身体の一部の切除の要素）に注目すれば、インドではそれまで見られなかったものが11世紀ころの『ジャイミニ・バラタ』で突如現れているのは、ヨーロッパにそれより先行した確たる文献が不在だと

はいえ、ヨーロッパから東へ流入した可能性もありえなくはない。デレットの説を否定するに足る証拠は見出し得なかつたわけだ。

それぞれのプロットがそこを源郷と確定するには、自然環境、生活習慣、宗教観、文化等々の観点から説明する必要があるのだろうが、もはや紙幅も尽きようとしているので今は触れられない。ただ今回、同じ類型に分類される説話であつても必ずしも一様の伝承経路を経たわけではなく、それぞれが様々な経緯をもつて絡み合っていることを知った。

最後に、先達はあまり声高に言及していないが俎上に載せるべきだと考える一点を指摘しておきたい。それは、ジプシー(ジタン、ツイゴイネル、ヒターノ、自称ロマ、ロム)<sup>19</sup>たちの存在である。彼らの、一応の定説となっている故郷、移動時期、主な生業、何れをとつてみても、とりわけ今回扱ったプロットFと重ね合わせて考えたとき、文芸伝承に一役買っていたに違いないと思えてくるのだ<sup>20</sup>。時には忌み嫌われ、虐げられる集団であつたかもしれないが、芸術のもつ力は日常をも超越するはずのものである。カルメンしかり、オペラ座の怪人(の育ての親)「田中：400」しかり。

もう一言、感想だけ。今回扱ったテキスト資料を全部原典で読めたら、さぞ成果は大きくなつたことだろう。一人では到底わからないが、共同研究なら可能だ。その点、本学は理想的なりソースを持ち合わせている。同じ職場の仲間とこうした研究をゆつたりと進められるような環境が、いつか訪れることを願つてやまない。

注

(\*) 二〇〇六年七月九日サッカー・ワールドカップ・ドイツ大会決勝戦イタリヤ・フランス戦で、イタリヤのマテラッツィ選手の暴言にフランスのジダン選手が頭突きで応え退場処分となったこと。後日の報道によれば、マテラッツィ選手はジダン選手の家族を侮辱することばをかけたとされる。

(1) そのときまとめた未公表研究ノート「インド古典に見る手紙の諸例と使者文学」は、近々公表する予定である。その際、Banerji, Sures Chandra, 1958, "A Study of Epistolary and Documentary Literature in Sanskrit", *Indian Historical Quarterly*, vol. XXXIV, Part 3&4, pp. 226-250. 並びに Banerji, Sures Chandra, 1977, "Epistles and Documents in Sanskrit", *Our Heritage, Bulletin of Department of Post-Graduate Training and Research, Sanskrit College, Calcutta*, vol. XXV, Part 2, Calcutta, pp. 3-20. はサンスクリット文学作品における手紙の描写箇所が抜粋紹介されていて有益だった。また Mondal, Balaram ed., 1989, *The Patrakamudh of Varanuci*, Calcutta: Everest Publisher はいわゆる手紙の書き方指南書で、それに関する研究が Banerji, Sures Chandra, 1960, "Pitra-kaumudh of Varanuci", *Bulletin of the Deccan College Research Institute*, vol. XX, Part 1-4, pp. 3-18. である。

(2) 拙論「ジャータカにみる手紙——古代インド文字文化断章——」『印度学佛教学研究』第54巻、第1号(二〇〇五年十二月)、三七五—三八二頁。このなかで、僅かながら手紙の素材(樺の樹皮、貝葉)にも触れた。最近、メソポタミアの例だが、粘土板に文字を刻み、それを粘土の封筒に入れてやりとりした、紀元前18世紀頃と見られる遺物が発見されたという(『朝日新聞』二〇〇六年二月七日付け文化総合面記事)。

(3) *Jainini-bharata* は *Jaininiyāsvamedha* と呼ばれる[Smith: 194]。アシシュヴァメーダとは、まさに霸王のみがおこないうる壮大なヴェーダ祭式で、犠牲獣としての馬が本祭の前年に一年間まったく自由に野放しにされ、誰の領域に至ろうと王の軍隊はその馬を守らねばならない。その一年間、

主祭場では予備祭が続けられるが、そのひとつに説話朗誦があり、10種類の主題の説話が10日のローテーションで毎日朗誦され、最終的には各主題の説話が計36回語られることになるという。詳しくは、手嶋英貴2001「アシユヴァメーダにおける説話朗誦の発展史…パーリプラヴァ朗誦とヴェーナー奏者の歌」『仏教文化研究論集』第四巻、三三―六二頁および [Koskikallio 1993, 1995] を参照のこと。

- (4) 財団法人・東洋文庫（東京・本駒込）に所蔵されている故辻直四郎博士の旧蔵書、辻文庫のなかに見出すことができた。そのほかテクストおよび翻訳、研究の出版状況については [Derratt : p.19, n.2 および p.22, n.18]。また、Emeneu, M.B., 1967 (rpt.), *A Union List of Printed Indic Texts and Translations in American Libraries* (American Oriental Series, vol.7) New York (1st ed. : 1935) には Schick 版のほか2点が紹介されている。ちなみに、Library of Congress のオンライン検索では、*Jainimbharata* および別名の *Jainimiyasvamedha* で検索し、計8件がヒットし、そのうちサンスクリットのテクストが2点（ムンバイ版一八六三年と一九三二年?）で、あとはヒンディー、ベンガリー、カンナダ各1点、テルグ2点、不明1点であった。また、Jan Gonda 編集の *A History of Indian Literature* (Wiesbaden) のシリーズで、諸近代語の巻も調べたが、マラーティー語に *Dāsosuta Mudgala* という文人による同名の物語集があることが確認できた (Tulpule, Shankar Gopal, 1979, *Classical Marathi Literature from the beginning to AD 1818*, HIL vol.9 Fasc 4, Wiesbaden : Otto Harrasowitz, p.365.)。
- (5) 17世紀初頭におそらく南インド出身のち北インド活躍したとされる *Nabhadās* によるヴィシュヌ派の聖者列伝 *Bhakt-mat* にたいして、チャイタニヤ派の *Priyadas* が一七二二年に著した注釈書 *Bhakti-rasa-bodhini*。これらについては [McGregor, 1984 : 108-109] および Pollet, G., 1980, “The Old Braj Hagiography of Nabhadās,” *Early Hindi Devotional Literature in Current Research*, ed. by W. M. Callewaert, Leuven, pp.142-149. を参照。なお、『バクトウ・マール』には合計86人の神格および聖者にまつわる逸話が収録されているが、チャンドラハーサは27番目に位置している。 **Dksit**,

**Prakāśanarayan**, 1961, *Nabhadās kṛt Bhaktmat* (in Hindi), Itanabad, p.57.

- (6) ヴィシュヌ神の象徴としての石で、これが信者を守護するとされる。ネパールのガンダキ川源流地域の地名シャラグラマから由来し、その付近で産出するアンモナイト様の石のことをそう呼ぶようになったようだ。形によって様々な名称をもち、また、これの効力が発揮された物語などが各種のプラーナ文献で語られている。Mami, Vettam, 1975, *Purānic Encyclopedia Delhi*; Motilal Banarsidas (1st ed. in Malayalam : 1964), pp.672-673. を参照。

(7) ヒンドゥー教ヴィシュヌ（クリシュナ）・バクティ信仰の布教を旨とする語りものであったことから、聴衆である民衆の嗜好に迎合しながら拡大していったとする見方 [Smith] もあるが、同趣旨の教派的作品に伝承上同様の特徴が認められるか、精査する必要がある。

(8) 本来、毒という単語は *visa* であるが、中世期、*s* 音が実際のところ *ś* 音と区別できないこと、一方 *kh* 音の文字が *ray* の文字と紛らわしかったこと、の双方の事情が融合して、*s* 音字でもって *kh* 音を表すことが一般化した時期があった。なお、*v* 音と *b* 音の混同も希有ではない。

(9) この分類番号は [Thompson, 1955] におけるそれを踏襲している。

(10) ストーリー展開に大差ないが、シャリーグラマの入手法がお弾き遊びのお弾き用の石を探して道ばたで拾ったという点などは、教育漫画本と同じ。Godabole, 1882, “Folklore-The Story of Chandrasahā,” *Indian Antiquary*, vol.XI, pp.84-86.

(11) 王妃パイドラーは継子ヒッポリュトスを見せめ、夫テーセウスの不在中、言い寄るも断られ逆上し自害するが、腹いせに「ヒッポリュトスに手込められそうになった」と偽りを記した書板（内側に文字を記した二枚の板を重ね併せ、中央部の穴に紐を通して堅く結び封印した、まさに手紙）をのこす。エウリーピデース作・松平千秋訳 1959 『ヒッポリュトス——パイドラーの恋——』（岩波文庫1040）岩波書店。

(12) 小山和編著、小山いをり挿画 2002 『不思議の国の物語2…庶民の知恵の巻——インド民話の森、死の手紙』人類文化社、一〇四―一六五

頁、はまさに「死の手紙」物語だが、編著者によってかなりアレンジされていると断られている。具体的に依拠した原典を知りたくて出版社に問い合わせたが回答を得られていない。脚色部分を除けば、プロットはA・F(E)・C・Dの構成となっているから、仏教系の特徴を備えた作品に基づいているものと思われる。

(13) こうした文献資料にもつきベンファイ (Theodor Bentley, 1809-1881) が動物寓話以外の説話のインド起源説を唱えたり、ヘルテル (Johannes Hertel, 1872-1955) も同様に寓話のインド起源説をとった「辻：167」が、当然それに対する反論もあったし、この問題をめぐる様々な展開もあった「松原：93-109」。起源を議論するという発想自体、余計な思惑に左右されやすいだろうから、研究者の置かれた環境を含めて、研究史そのものも検証すべき研究対象ではあるだろう。

(14) 最近の西アジアでの新たな文献の発見などによって、『シンドバード物語』のインド起源説を全面的に否定しペルシア起源を主張する論考もある「ペリー」。

(15) 詩人でも文字が読めない例として良く知られているのは、インド中世のバクティ信仰詩聖カビール (一四四〇—一五一八?) である。彼は非識字者であったにもかかわらず後世に影響を与える多くの宗教詩をのこした。詳しくは、カビール著、橋本泰元訳注 2002『宗教詩ビージャク——インド中世民衆思想の精髓』(東洋文庫、703) 平凡社。

この話の概要は「南方：38」にもある。また詩人ムタラムミスがこうして逃亡したあとの話が『アラビアン・ナイト』第385夜の「アル・ムタラムミスとその妻の話」(前嶋信次訳 1978『アラビアン・ナイト9』(東洋文庫 339) 平凡社、二五三—二五四頁) である。前嶋の索引「前掲同書、後から「8」ページ」も重要。

(16) ユーサらによるいわゆるAT番号分類目録には、『ペンタ・メローネ』や『グリム』といった文献化、作品化されたものからも拾っている。

(17) このスタインの書のイントロ部にW. Crokeによる「死の手紙」モチーフの解説があり、我々がすでに見てきたシェークスピアや『カタター・サ

リット・サーガラ』の例が紹介されているほか、民話としては、パンジャービー語の「七人の母の息子」、ベンガリー語の「七人の母が乳を飲ませた男の子」、言語の言及がないが「勇敢なるヒーラーラールバーサー」「悪魔と王子」という話があるという。また、『シンドバード物語』の「孤児アハメッド」にも言及していた [Croke: xlii-xliii]。

(18) ユングマンはアールネの見解の検証作業を行った末、小アジア起源であると主張しているという「ブレードニコ：78」。

(19) ジプシーという呼称が差別語であるか否か、およびロマという自称などについては、水谷曉 2006『ジプシー、歴史・社会・文化』(平凡社新書) 平凡社、三五—四三頁。

(20) グループはジプシーの貢献を過度に評価することには慎重ながらも、拙論とは別の幾つかのモチーフについて、ジプシー民話を『ゲスタ・ロマニーウム』や『デカメロン』と対比したり、インド—ジプシー—ヨーロッパにパラレルに見られる説話を8種紹介している [Groom: lxiii-lxiv]。また最終的な見解として、時期は定かではないがインドを発したジプシーが、インド民話を携えたままバルカン半島に至り数世紀間そこに滞在した。その間に民話を広め、かつまた自らもギリシャ民話などを吸収し、そうした民話をも携えて15世紀からヨーロッパ各地やブラジルにも分散したとしてくる [Groom: lxxii-lxxiii]。別の民話の例であるが、田中於菟弥 1991「説話の流伝——エジプトから日本へ」『酔花集——インド学論文・訳詩集』春秋社、八九—一〇六頁の九七頁注(1)にジプシーによる説話波及の可能性が示唆されている。

参考文献一覧(注で言及済みのものを除く)

『ジャイミニ・バーラタ』関係

太田信宏 2006「カルナータカ宮廷文学の歴史——文学記述の言語とその時代的変遷——」『南アジア言語文化』第四号、二九—五七頁。

- Brockington, John, 1998, *The Sanskrit Epics, Handbuch der Orientalistik*, 12 Bd., Leiden ; Brill.
- Derritt, J. Duncan M., 1970, "Greece and India again : the Jaimini-Āśvamedha, The Alexander-romance and the Gospels" *Zeitschrift für Religion und Geistesgeschichte*, Bd.22, pp.19-44.
- Grierson, George A., 1910, "Gleaning from the Bhakta-mala" *Journal of the Royal Asiatic Society*, pp.87-109, 269-306.
- Keith, A. Berrisdale, 1993 (1st Indian ed.), *A History of Sanskrit Literature*, Delhi ; Motilal Banarsidas. (1st ed. : 1928)
- Koskikallio, Petteri, 1993, "Jaiminibhārata and Āśvamedha" *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens, Supplement, Proceedings of the VIIIth World Sanskrit Conference, Vienna, 1990*, Wien, pp.111-119.
- Koskikallio, Petteri, 1995, "Epic Description of the Horse Sacrifice" *International Conference on Sanskrit and Related Studies (Sept., 23-26, 1993) Proceedings*, Cracow Indological Studies, vol.1, Cracow ; The Enigma Press, pp.165-177.
- Krishnamachariar, M., 1974 (3rd. ed.), *History of Classical Sanskrit Literature*, assisted by M. Srinivasachariar, Delhi ; Motilal Banarsidas, p.43. (informed by 大田論文)
- Pai, Anant ed., Subha Rao script, Pratap Mulick illustrated, n.d. *Chandhrhasa* (in English Comic), Amar Chitra Katha, No.97, Bombay ; Indian Book House.
- Schick, J. ed., n.d., *Das indische Hamlet-Epos, Aus dem Jaiminibharata*, Separatdruck aus dem Corpus Hamleticum (1912).
- Smith, W. L., 1997, "The Jaiminibhārata and its eastern vernacular versions" *Societe Orientalis Fennica* (Studia Orientalia, vol. 82), Helsinki, pp.193-208.
- Weber, A., 1869, "Über eine Epistode im Jaimini-Bharata (entsprechend einer Sage von Kaiser Heinrich III und dem "Gang nach dem Eisenhammer")" *Monatsberichte der Preussischen Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-Historische Klasse*, pp.10-48, 377-387.
- Wheeler, J. Talboys, 1867, *The History of India from the Earliest Ages*, vol.1

The Vedic period and the Maha bhārata, London; N. Trübner & co., (ch.IV : Chandhrhasa and Bikya, pp.522-534.)  
 サイト情報一 [http://www.geocities.com/harindranath\\_a/maha/variation/jaimini1.pdf](http://www.geocities.com/harindranath_a/maha/variation/jaimini1.pdf)

- 〈その他のインド古典関係〉
- 岩本 裕 訳 1954, 57, 58, 61 『インド古典説話集カター・サリット・サーガラ (1) 』 (4) (岩波文庫・赤66-1-4) 岩波書店。
- 岩本 裕 1958 「ヨーロッパとインド文化」『インド文化』第1号 (日印文化協会) 一九—三四頁。
- 岩本 裕 1960 「ヨーロッパとインド文化 (1)」『インド文化』第2号 (日印文化協会) 一—二二頁。
- 岩本 裕 1974 『仏教聖典選 第二巻 佛伝文学・佛教説話』読売新聞社。
- 岩本 裕 1978 『仏教説話研究 第二巻 仏教説話の源流と展開』開明書院。
- 岩本 裕 1994 『インドの説話』(精選復刻・紀伊國屋新書) 紀伊國屋書店 (初版 : 1963)。
- ヴァンデルニッツ著、中野義照訳 1965 『インド文献史第2巻 叙事詩とプラーナ』日本印度学会。
- ヴァンデルニッツ著、中野義照訳 1966 (a) 『インド文献史第3巻 仏教文獻』日本印度学会。
- ヴァンデルニッツ著、中野義照訳 1966 (b) 『インド文献史第4巻 ジャーナ教文獻』日本印度学会。
- ヴァンデルニッツ著、中野義照訳 1966 (c) 『インド文献史第5巻 インドの純文学』日本印度学会。
- 定方晟 1982 『アショークカ王伝』法蔵館。
- 定方晟 2000 「クナーラ物語——テキストと和訳——」『東海大学紀要文学部』第74輯 一—四三頁。
- 成田昌信訳 1932 「六度集経」『国訳一切経・本縁部六』大東出版社。

- 辻直四郎 1973 『サンスクリット文学史』（岩波全書）岩波書店。  
 千潟龍祥 1954 『本生経類の思想史的研究』付篇「本生経類照合全表」、  
 東洋文庫。  
 平岡聡 2002 『説話の考古学——インド仏教説話に秘められた思想——』  
 大蔵出版。  
 水野弘元監修、中村元・平川彰・玉城康四郎責任編集 1966 『新・仏典解  
 題事典』春秋社。  
 南方熊楠 1972 「英雄美人叢談」『南方熊楠全集』第五巻、平凡社、  
 三三三—三六七頁。  
 山崎元一 1979 『アシヨーカ王伝説の研究』春秋社。  
 Burlingame, Eubene Watson, tr., 1922, *Buddhist Parables tr. from the Original Pali*,  
 New Haven, Yale Univ. Press.  
 Hardy, E., 1898, "The Story of the merchant Ghosaka (*Ghoisakaseithi*) in its  
 twofold Pali form, with reference to other Indian parallels", *JRAS*, pp.741-794.  
 Hertel, Johannes, 1911, "The Story of Merchant Campaka" *ZDMG*, Bd.65, pp.1-51,  
 425-471.  
 McGregor, Ronald Stuart, 1984, *Hindi Literature from its Beginnings to the  
 Nineteenth Century, A History of Indian Literature*, vol. VIII, Wiesbaden ; Otto  
 Harrassowitz.  
 Penzer, N. M. ed., 2001 (rpt.), *The Ocean of Story: Being C. H. Tawney's  
 Translation of Somadeva's katha sarit sagara*, 10 vols., New Delhi ; B. R. Publ.  
 (1st ed.: 1924-28, London).  
 Tawney, C. H. tr., 2000 (rpt.), *The Kathakosha*, Encyclopadia of Indian folk  
 Literature, vol.11, New Delhi ; Cosmo Publ. (1st ed.: 1895).

〈西アジア関係〉

- ペリー、B・E著、西村正身訳・解説 2001 『シンドバードの書の起源』  
 未知谷。

〈ヨーロッパ古典関係〉

- 伊藤正義 1994 『ゲスタ・ロマノールム』篠崎書林（初版：1988）。  
 大野敏英・石中象治 1948 『シルレル詩全集（上）（下）』白水社（初版：  
 1944）。  
 柏熊達生 1957 ボッカッチョ 『デカメロン（七）』（新潮文庫）新潮社。  
 杉山洋子・三宅忠明 2005 ジャンパティスタ・バッジレ 『ペンタメロー  
 ネ——五日物語（上）（下）』（ちくま文庫）筑摩書房。  
 関敬吾・川端豊彦 1999 『完訳 グリム童話Ⅰ—Ⅲ』（角川文庫）角川  
 書店。  
 田中早苗 1930 『オペラ座の怪』（世界探偵小説全集11）平凡社。  
 中村義也・中務哲郎 1981 『ギリシア神話』（岩波ジュニア文庫40）岩波  
 書店。  
 野島秀勝 2002 シェイクスピア 『ハムレット』（岩波文庫 赤2049）  
 岩波書店。  
 前田敬作ほか 2006 ヤコブス・デ・ウォラギネ 『黄金伝説1〜4』（平  
 凡社ライブラリー）平凡社（1979-87 人文書院刊の再版）。  
 松平千秋 1993 ホメロス 『イリアス（上）（下）』（岩波文庫・赤102-1）  
 岩波書店。  
 松原秀一 1992 『中世ヨーロッパの説話——東と西の出会い』（中公文庫  
 ㊦21-1）中央公論社。  
 三宅忠明 2000 『比較文化論・民間説話の国際性』大学教育出版。
- 〈民話研究関係〉
- アールネ、アンティ著、関敬吾訳 1969 『昔話の比較研究』（民俗民芸双  
 書40）岩崎美術社。  
 ヴリスロキ、ハインリヒ・フォン著、浜本隆志編訳 2001 『シプシー』  
 の伝説とメルヘン——放浪の旅と見果てぬ夢』明石書店。  
 稲田浩二編者代表 2004 『世界昔話ハンドブック』三省堂。  
 斎藤君子 2004 「予言（AT930）」稲田浩二編者代表『世界昔話ハンドブッ

- ク』三省堂、一五七—一五八頁。
- ストークス、M・S・H著、アダムス保子訳 1979 『インドの民話——馬鹿なサチュリの話』大日本絵画。
- 関敬吾 1973 (第7版) 『日本昔話集成 第二部本格昔話2』角川書店 (初版：1953)。
- 高垣謹之助 1993 『東甬塞物語』(中公文庫) 中央公論社。
- ブレードニヒ、ロルフ・W著、竹原威滋訳 2005 『運命の女神——その説話と民間信仰』白水社 (初版：1989)。
- 三原幸久編 1989 『ラテン世界の民間説話』世界思想社。
- ミルン、A・B著、牧野異・佐藤利子訳 194 『シヤン民俗誌』生活社。
- ラーマヌジャン、A・K編、中島健訳 1995 『インドの民話』青土社。
- Blackburn, Stuart, 2001, *Moral Fictions: Tamil Folktales from Oral Tradition* (FF Communications, No.278), Helsinki.
- Crooke, W., 1989, "On the Folklore in the Stories" (An introduction in) *Hatim's Tales: Kashmiri Stories and Songs* by Aurel Stein, New Delhi, pp. xxx-xlviii.
- Groome, Francis Hinde, 1899, *Gypsy Folk Tales*, London ; Hurst & Blackett.
- Kingscote, Howard & Pandit Nayesa Sastri, 2001 (ppt.), *Tales of the Sun or Folklore of Southern India*, New Delhi ; Cosmo Publ. (1st ed. : 1913, London).
- Knowles, J. Hinton, 2004 (2nd ed.), *Folk-tales of Kashmir*, Delhi; Low Price Publ. (1st ed: 1893).
- Stein, Sir Aurel & Sir George Grierson, 1989 (ppt.), *Hatim's Tales Kashmir Stories and Songs*, Delhi ; Gian Publ. House (1st ed. : 1923, London).
- Thompson, Stith ed, 1955, *Motif Index of Folk-Literature*, 6 vols, Bloomington ; Indiana Univ. Press.
- Thompson, Stith & Jonas Balys, 1958, *The Oral Tales of India*, Bloomington ; Indiana Univ. Press.
- Thompson, Stith, 1977 (ppt.), *The Folktale*, Berkeley and Los Angeles ; Univ. of California Press. (1st ed. : [1946]).
- Uther, Hans-Jörg, 2004, *The Types of International Folktales: A Classification*

*and Bibliography, Based on the System of Antti Aarne and Stith Thompson* (FF Communications, No.286), 3vols, Helsinki.